

## 黒澤映画における医療の役割

岩崎達朗（医学部3年）

指導教員：山本武男

日本を代表する映画監督である黒澤明は、世界中の映画界の巨匠たちに影響を与えている。彼は生涯に30本の映画を製作したが、そのうち6作品は医師や患者といった医療を扱ったものとなっており、全体の5分の1を占めている。その6作品とは、医師と結核患者の登場する『酔いどれ天使』（1948年）、梅毒患者の医師が登場する『静かなる決闘』（1949年）、結核患者の登場する『醜聞（スキャンダル）』（1950年）、胃がん患者の登場する『生きる』（1952年）、病院のインターンが登場する『天国と地獄』（1963年）、江戸時代を舞台に、医師と見習い医師の登場する『赤ひげ』（1965年）である。

医療を扱った黒澤映画に関して、医師にみられる共通点や、各作品より考察される医師や医療の意義については既になされている研究も存在するが、これらの研究が対象とした作品は上記の6作品のうち3作品や4作品のみであり、完全なものではない。

本論では、まず「総論」として、上記6作品を研究対象として浮かび上がった、黒澤映画における医療の役割について述べている。黒澤映画には、医療を扱った作品に限らず全体を通して「二部作的構成」という傾向、つまり、一作仕上げることでテーマに対する考察を深め、もう一作似た問題意識を持った作品を作るという傾向があることがわかった。さらにこの傾向は特に医療を扱った作品において顕著に表れている。即ち『酔いどれ天使』と『静かなる決闘』は「医師と患者二部作」となっている。また『醜聞（スキャンダル）』と『生きる』は「末期の患者二部作」となっており、これに関しては、黒澤の代表作のひとつである『生きる』の主人公の着想を、黒澤が自身の作品である『醜聞（スキャンダル）』に登場する脇役から得ていることが示唆された。また、『天国と地獄』と『赤ひげ』は「理想の医師の形成二部作」となっており、いずれも医師の見習いが登場する作品となっている。

加えて、黒澤映画に通有の「人間の理想像」や「師匠と弟子」といった問題意識が、医療を扱った作品ではより際立った形で描かれていることも理解された。即ち「人間の理想像」は、理性に従う人物としての医師を通して鮮明に描かれると同時に、医師として描くことで現実味を帯びせることに成功している。また、医師の指示として表される理性に従う患者は快方に向かうのに対して、理性に従わない自己中心

的な患者は死や発狂を迎えるといったように、理性を重視する黒澤の理想の人間像は、生死の関わる医療を扱うことでより印象的に伝えられる。そして「師匠と弟子」の関係は、患者は医師の指示に従わなければ病気を治癒させることが困難であるという「医師と患者」の関係によって強調されている。

このように作品全体を俯瞰して考察を行った後、「各論」として研究対象とした6つの作品それぞれに特化して考察を行った。即ち、作品中で描かれる結核や梅毒、胃がんといった病気とその治療法の歴史について詳述し、登場する患者の病状について医学的な視点から分析を行った。また、日本における医師研修制度や麻薬中毒患者の時代背景についても明らかにし、さらには作品に描かれる倫理や心理の問題点についても考察を行った。